



電力小売り自由化とエコハウス
としての正しい選択とは

4月から一般家庭への電力販売が自由化された。我が羽根木エコハウスでは、再生可能エネルギー主体で電力供給する会社へ電力の購入先を変更した。

羽根木エコハウスでは、2015年度には、建て替え前の1999年度実績比でおよそ80%の二酸化炭素(CO₂)を削減した。これはすでに査読論文(環境情報科学44巻3号)として公表しており、詳細はそこに譲るが、80%の内訳を簡単に見ると、23~24%分は太陽光発電、太陽熱床暖房、太陽熱給湯といった再生可能エネの利用で実現した。逆に言えば、57%分程度が省エネになる。

羽根木エコハウスでは、電力分のCO₂排出量の計算においては、建て替え前の1999年度の電力の排出係数を固定的に使っている。我が家の排出量が専ら我が家の努力のみを反映し、責任範囲外の東電の排出係数の変動によって左右されないようにするためである。東電の公表資料によれば1999年度の同社の排出係数は326g-CO₂/kWhだったが、最近年の14年度分は496g-CO₂/kWhと、52%も悪化している。我が家のCO₂の約半分は電力起源なので、16年に及ぶ営々とした努力の積み重ねで実現した57%分の省エネによる削減のほぼ1割相当(5%ポイント)が東電の排出係数の悪化によってキャンセルされてしまう。とてもこれはエコハウスとして甘受できない。

電力小売り自由化とは、仮に私が東電の電力を使い続ければ、これを選んで買っていることを意味し、排出係数を我が家の責任範囲外として固定しておく理屈がなくなる。そこで排出係数ももっと低い電力を販売できる会社を探し、そこと電力供給契約を結ぶことにした。

大変残念なことに、各電力販売会社の販売する電力のCO₂排出係数は、おおらかなベストエフォート方式で予め提示されるのではなく、いかにも重箱の隅を突つたような理由(確保済の低炭素電源が不足する際の電力市場からの購入分が事前には分からないこと)で、言ってはならないことになっていて、会社選択には苦慮した。この仕組みの下では、消費者は、安いだけの電力か、FRINGEベネフィット(併せ販売のおまけ)の多い電力しか選べないので、大変遺憾に思う。そうした中で、排出係数は約束しないまでも、太陽光やバイオマスなどによる電力を主体に供給すると

宣言している会社もいくつかあった。その中から、みんな電力株式会社(東京都世田谷区)を選んだ。地元ということもあったが、選択の理由の一つは、その料金体系がシンプルな従量(消費量比例)方式になっていることにある。低い排出係数に安堵して節電を放棄するのではなく、それに努力すれば経済的に報われるのであって、他の会社のように、多量に電力を使うと割安になるような環境破壊的なインセンティブを持たない点に好感が持てた。さらに、同社は個々の消費者が応援する発電家を特定する仕組み、言い換えれば、ヴァーチャルな託送の気分を味あわせてくれる仕組みも用意していて、これも面白かった。

正確な排出係数は1年以上遅れて公表されようが、東電の半分、200g台前半にはなるのではないかと期待している。

写真は新たに選択した販売会社に消費量データを送るためのスマートメーター(上)と、下は取り外し前の、東電への太陽光発電余剰分の売電量をカウントするアナログメーター。この写真は、我が家での取り換え工事の途中を写したもので、スマートメーターは、買電、売電の両方を1台のメーターで計測するため、最終的にメーターは一つに集約された。



小林 光

慶應義塾大学大学院特任教授
工博・元環境事務次官
エコ・スーパービジョン代表

